

# 図書館だより

National Defense Academy Library Bulletin

2016. 3. 12

主な内容		頁
我が学生時代の読書 ～論理的思考力～	…… 幹事 陸将	小林 茂 (525)
教官著書の紹介	…… 情報工学科	白川 智弘 (528)
教官推薦図書を紹介	…… 国防論教育室	大久保 英樹 (530)
学生推薦図書を紹介	…… 本科4学年	小沼 慶明 (533)
図書館からのお知らせ	……	(535)

## 我が学生時代の読書 ～論理的思考力～

幹 事

陸将 小林 茂

今回、この「図書館だより」を書くにあたり、自分のこれまでの読書を振り返ってみた。おそらく誰でも、自分の読書を数個のカテゴリーに分けることができるだろう。自分の例で言うと次のようになる。

第一には、自らの業務上や個人的に興味のある分野に関して「知識を得る」というものである。例えば、国内外情勢に関する本や我が国及び世界の各地域・各国の歴史に関する本などがこれにあたる。

第二には、自分のものの考え方や言動、生き方に関して参考となる本、すなわち「自己の修

養・研鑽」の目的で読む本である。これには、著名な古典や歴史上の人物の伝記、高名な経営者の著書、文芸小説などがある。これらの本は、実に含蓄があり、人生や勤務における姿勢について改めて考えさせてくれる。

第三には、純粹に娯楽として読む本である。自分は謎解きが好きでミステリー小説をよく読む。様々な伏線を拾い集めて最後の謎解きへ進んでいくのは、仕事で疲れた時のリフレッシュにちょうど良い。最近では、本にまつわるミステリーを題材にした「ビブリア古書堂の事件手帖」という小説が気に入っている。

さて、今回、このような分類をしていく中で、「そういえば学生時代には読んでけれども、自衛官になってからは読んでないな」という類の幾冊かの本が頭に浮かんだ。これは自衛官任官後には読まなくなったが、卒業後の勤務で役に立ったと思う本である。強いて区分すると第一のカテゴリーに入るかもしれないが、少し違う気もする。今回はその書籍を紹介しようと思う。自衛官になってから親しんだ本を紹介しても良いのだが、幹事にもその昔に学生時代があり、「学生の時にはこんな本を読んでいたんだよ」という話も悪くないだろう。

それらの本、それは「論理的に考える」という方法について書かれた教科書のような本である。幹部自衛官は、単に上司から言われたことだけを一生懸命やっていたら良いのではなく、自ら問題点を明らかにし、その解決を図ることが求められる。その際、必ずと言って良いほど「論理的に考えよ」「論理的に説明せよ」といった指導を受ける。この「問題点を明らかにし、論理的思考に基づいて解決策を案出する」という過程で、論理的に考える能力は極めて重要な識能となる。

この能力は、最初から身につけているわけではない。その方法を学び、それを問題解決に適用していくことを繰り返すことで身につけていく。我々は単なる博識家になるわけではなく、知識は妥当な結論に至るための手段と捉えるべきである。もちろん、知識が不足しては妥当な結論には到達し得ないが、いくら知識があっても、それを論理的に運用する力が無くては、これもまた同様の結果を招く。従って、知識を得るための読書だけではなく、論理的思考力に焦点を当てた読書もまた必要とされる。コンピューターで言えばOSについて学ぶようなものである。特に学生時代にこの力を養っておくことが、幹部自衛官として勤務していく上で役立つと思う。ここでは、忙しい学生諸君のことを慮り、手にとりやすい新書版の本を3冊紹介することにする。

1冊目は、『創造の方法学』（高根正昭著）である。

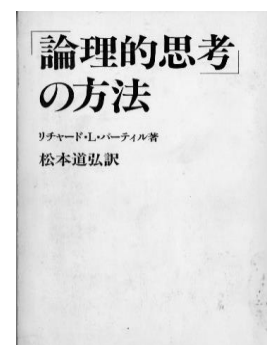


1979年に第1刷が発売、2015年に第46刷を数えており、今なお、古さを感じさせない。

著者は、社会学者である。若い頃、米国で研究者として勤務した経験が、この本を著す契機となった。米国の大学における研究者には、小さくとも新たな知識を既存の体系につけ加えることが必要とされた。そのためには方法論への習熟が必須だったのである。当時の日本はそのような環境ではなかったと著者は書いているが、もちろん今は違うだろう。幹部自衛官も単に状況を説明するだけではなく、その原因や解決策の論理的な提示が求められる。

社会学においては、社会、すなわちある人間集団に関して現状を評価し、その内的・外的要因を探って因果関係を明らかにし、それを他の類似の集団にも適用していくという手法をとる。本書では、実験的方法・統計的方法・比較例証法・参加観察法・事例研究法といった各種の手法が紹介されている。ここで個々について説明する紙幅は無いが、今後、学生諸君が幹部自衛官に任官し、部隊という人間集団の中で勤務していく際に、これらの手法を知っていることは糧となる。

2冊目は、『論理的思考』の方法（リチャード・L・パーティル著、松本道弘訳）である。



この本も1979年が初版である。4月に初版、その年の6月には3版となっている。その後、版を重ねたとは思いますが、現在、新版は売られていない。図書館には2冊ある。

本書は、論理的思考や適切に議論を進めるための手順や具体的要領を教えてくれる。それは「定義」「分類」「構成」、「議論の方法」という形で区分され、議論の方法では「演繹法」と「帰納法」が紹介されている。また、議論において陥りやすい点として「仮定」「虚偽」「弱い議論」という点が指摘されている。

論理展開においては、定義の明確化と、その適切な分類が出発点となる。これが適切になされない場合、自らの論旨が曖昧になり、他人との議論においても議論の停滞を招く。その後、論証によって論理を進めていくのだが、この論証に使用する方法が演繹法と帰納法である。演繹法とはある一つの命題を出発点として論理を展開していくものである。一例をあげると「防衛大学校は幹部自衛官となるべき者の教育訓練を司る」という命題を出発点として、防大における教育訓練・規則・施策等を導き出していくことがこれに該当する。一方、帰納法とは、個々の部分的な事象から全体的な一般論を導く方法である。例えば、様々な事象を総合してある組織の規律や士気などを評価する時などに使用される。また統計的な推論によって因果関係を探る場合にも使われる。

本書は、訳本のためやや表現が分りにくく、取り上げられている事例も旧聞に属し、更には若干の誤植があるという難点はあるが、論理的思考力を向上させるための基礎的な書籍として役立つと思う。

3冊目は、『推計学のすすめ』（佐藤信著）である。



1968年の著作であり、手元の本は1980年、25刷。今なおAmazonで新品が売られている。

論理を進める論証において、最も力を発揮するのは数値による論証である。この際に統計・推計という手法が必要となる。本書は、統計・推計について可能な限り解り易く解説した本である。ここでは、サイコロを振る実験や利き酒の能力に関する検定など、解り易い例をあげながら統計の考え方が紹介されている。数式が苦手な人文系の自分でも読むことができた。統計に関する知識は、自衛官としての業務のみならず、政治・経済・社会について考える際にも、また日常生活においても役に立つ。それは自分が論証する時に使用するだけではなく、数値に惑わされないようにするためにも必要な識能である。特に数式が苦手な諸君には一読をお勧めする。

今回、論理的思考力を養うための入門書として学生時代に読んだ本を紹介した。現在、防大において文理交叉教育が推進されているが、理工系の諸君には社会科学的手法や言語による論理の展開にも、また人文系の諸君には定量的な統計的手法にも、是非、慣れ親しんでもらいたい。学生間に論理的思考力を高め、卒業後、様々な場面で論理的思考に基づく説得力ある議論を展開して活躍されることを期待するものである。

※図書館所蔵図書の請求記号と配架場所

・創造の方法学

914.6-Y74

(1階 文学図書配架コーナー)

・「論理的思考」の方法

116.1-P97

(地階 哲学図書配架コーナー)

・推計学のすすめ

近日購入予定

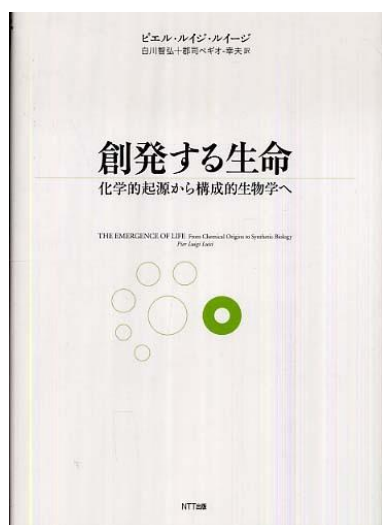
## ~~~~~教官著書の紹介~~~~~

## 『創発する生命：化学的起源から構成的生物学へ』

—生命とは何か、とはどのような問題であるのか?—

ルイージ, ピエル・ルイジ 著 白川 智弘/郡司 ペギオ - 幸夫 訳 NTT 出版

情報工学科 助教 白川 智弘



生命とは何かを問う枠組みが提示される。ここで言う枠組みとは、物質科学の範疇において生命を問うための作法のみを論じたものではなく、生命に関する哲学的な考察を含む。第3章、第4章では生命を構成する生体分子がどこから来たのか、未解決であるこの問題に関する研究成果が網羅され、未だ謎は残るものの、今後どのようなアプローチが問題の解決を可能にするかについて整理されている。続く第5章から第7章では、物質たる生体分子の集合がいかにして生命に繋がるのか、そのギャップを埋めるため、より高次な構造を生み出す仕組みとして自己組織化、創発、自己複製及び自己再生産などの諸概念が解説され、第8章において、生命のミニマルな構成を説明する生命システム論であるオートポイエーシスが導入される。第9章から最終章である第11章までは、オートポイエーシスの概念を取り入れた生化学的実験を基礎として、生命たる細胞を生み出すためにはどうすればよいのか、その問題に対する具体的な取り組みが述べられる。

## はじめに：『創発する生命』とはいかなる書籍か

本稿で紹介する『創発する生命：化学的起源から構成的生物学へ』は、ローマ第3大学教授、化学・生化学者であるピエル・ルイジ・ルイージによって著され、2006年にCambridge University Pressより出版された"Emergence of Life: From Chemical Origins to Synthetic Biology"の全訳本である。本書は2009年に筆者と早稲田大学（当時神戸大学）教授の郡司ペギオ幸夫との共訳により、NTT出版より出版された。

本書は生命とは何かを問う本であり、もう少し具体的には生命の起源を問う本であり、そして、それらに関する考察を経由して、生命を創るためにはどうすれば良いかを問う本である。これらの問いに合わせ、本書の内容は次のような構成となっている。第1章、第2章ではまず、

## 本書に関して、お勧めの読み方

生命とは何かという問いは、誰にとっても関わりのある普遍的な問いであるが故に、どんな読者にとってもある程度の興味を喚起する内容であるのではないかと思う。しかしながら、本書は生化学に関する専門書としての側面を持つ

ため、読者一般が本書を通読することは難しいかもしれない。そこで、本書の読み方として非専門家である読者にお勧めしたいのは、第1章、第2章、第8章の順に読んでみることである。これらの章では生命を問うための準備としての哲学的、思弁的な枠組みについて述べられているため、専門知識を前提とせず、著者の生命に関する洞察に触れることができる。もしこれらの章を読んでみて、興味を持たたのであれば、残る章に取りかかっていたらと良いだろう。

以下、これらの章について簡単な解説を試みる。

### 第1章：生命の起源に関する概念的枠組み

第1章では、生命の起源を問うとはどういうことであるのかについての議論が為される。本書は必ずしも物質科学に根差した生命論のみを展開しているわけではなく、本章には創造論や人間原理に対する批判が含まれる。そして本章の最後で、生命の出現には何らかの必然性があったのだと主張する物理主義的な考え方を批判し、生命の登場に至る道筋における偶然（偶有性）を積極的に認める立場を表明する。

近現代の生物学は、生命現象が物理化学の法則によって説明可能であることを実証してきた。つまり、神の介在や生氣論は生物学の現場からは排除されてきたということであり、「生命現象を合目的性に基づいて説明してはならない」というのが現代生物学のルールである。しかしながらこのことは、生命の全ての側面が物理化学的な決定論、ないしは機械論によって説明できるということを保証するものではない。

以前、「生命と情報」という講義において生命システム論に関連する内容に触れた際、学生から「人間って結局機械的なものじゃないんですか？」という質問を受け、非常に驚いたことがある。確かに現代生物学は唯物論的、機械論的立場を主とするものであるのだが、学生の素朴な感覚にまでそれが浸透していることに非常に驚いたのである。もちろん、筆者は生物学の研究者として、このような立場を否定することは

しないが、科学には外側というものが存在するし、現代生物学の成功が、全ては機械論で説明可能であると保証するわけではないということを描きおきたい。そして本章を読むことにより、素朴な機械論の外側には何があり得るかを考えるためのヒントを得ていただきたい。

### 第2章、第8章：生命の定義とオートポイエーシス

第2章及び第8章で、本書における（一応の）生命の定義が示される。第2章では地球の生命について調査に来た宇宙人と農夫との架空の対話が為され、科学的素養を持たない、しかしながら地球の生命とは何かを直感的に知っている農夫が、地球の外から来た宇宙人に生命とは何かを説明する際、どう定義すれば納得してもらえるのか、という体で問答が行われる。答えを書いてしまうと、ここで採用される定義とは、「生命とは自分自身を創り出すシステムである」というものである。第8章で、オートポイエーシスという生命システム論が紹介されるが、オートポイエーシスにおける生命の定義は第2章におけるそれをより正確に表現したものであり、その定義は次の通りである。「生命とは、それ自身とその境界を生産するシステムである」。

自身を創り出す、というのはまだわかりやすいかもしれない。しかし、自身（と外側にある環境と）の境界を創り出すとはどういうことであろうか。簡単に言うと、これはつまり外側から何を受け取るかの選択肢を自分自身で創り出すということであり、内から外に何を出力するかの選択を自分自身で創り出すということである。言い換えると、自己が外部の環境にどう関わるか、そのやり方を自分自身で定義するのが生命であるとも言える。

### おわりに：その生命観は何の役に立つのか？

以上、『創発する生命』の解説として、本書の第1章、第2章及び第8章で紹介されている生命観を簡単に解説してみた。ここで述べられた生命観は、機械論的な現代生物学に対立するも

のでは決してなく、むしろ、生命に特有な構成、その特徴を以ってして、機械論を拡張しようという試みであると言えよう。

それで、結局ここで述べられたような生命観は一体何の役に立つのであろうか。著者であるルイージは、この理論をベースとし、「生命を創る」、その化学的実装に取り組んでいる。では読者である我々はこのような見方を何の役に立てられるのであろうか。論理的飛躍を恐れず言うとは、翻訳者として読者に読み取っていただきたいのは、本論が生命におけるある種の自由と固有性を主張しているということである。生命は物理法則に従わざるを得ないが（例えば身長 10 m の人間は存在し得ない）、各個体が固有の論理を持ち得るという意味で、自由を有していると言える（かもしれない。実はその獲得の仕方が物理法則に還元できるのではないか、という疑念までは解消できないが）。

もっと簡単な表現で、本稿を終えよう。生命であるあなたは何を受け取るのかを選択できるかもしれない。そのやり方は、物理法則からは自由に、あなたが選択できるかもしれない。生命に思いを馳せるのはそのような可能性に思いを馳せることであり、少なくとも、「ルールがこうだからこうすべき」といったような、正に機械論の極地、我が校にありがちな思考から自由になるためのヒントになるのではないだろうか。ルールに従うことしかできない、ルールを他者に強いるのみの愚か者とは、生命論の観点からは、ゾンビに他ならないのである。

※図書館所蔵図書の請求記号と配架場所  
461.6-L96  
(地階 自然科学図書配架コーナー)

## ~~~~~教官推薦図書の紹介~~~~~

『サイバー戦概論と危機管理—火箱芳文著『即動必遂』に関連して』

国防論教育室 1等陸佐 大久保英樹



平成 27 年 4 月から防衛学の選択科目として「サイバー戦概論」が新規に開講された。

私は平成 25 年 3 月に防衛学教育学群に配属されたが、國分良成学校長のご指導の下、同年 12 月頃から「サイバー戦概論」の新規開講に向けて準備を始め、約 1 年 4 か月という比較的短い期間で開講することができた。

「不易流行」という言葉があるが、本校が

大事なことは伝統としてしっかり守っていると同時に、状況の変化には柔軟に対応していることをこの新規開講は示していると思っ  
ている。いろいろな方々のご支援ご協力がなければこの科目は始められなかった訳で、その意味でも大変感謝している。

平成26年3月、自衛隊に「サイバー防衛隊」が新編されたことからわかるように、サイバー攻撃対処が自衛隊にとって重要不可欠であることは間違いない。ただ、サイバー攻撃の手法は日進月歩（秒進分歩？）で進化している。防大でサイバー教育を実施しても部隊で勤務する頃には古い知識になっているだろうから、サイバー教育を本校で実施するのは無駄ではないかという人がいるが、本当にそうなのだろうか。

サイバー攻撃を含めて、危機は往々にして突如やって来るが、危機が訪れる前にいかに物心両面の準備を整えていたか、危機の初動でいかに組織に適切な目標を与えることができたかで危機対処の成否が決まる。私の持論は、サイバー攻撃であろうが他の危機対処であろうが危機管理の根本は変わらないということである。

「サイバー戦概論」と共に、平成27年度後期に私の担当する「防衛学特論」は「自衛隊と危機管理」という内容に変更した。この防衛学特論の中で、大震災・原発・テロなどの危機管理の事例を通じてその課題とあるべき姿について考察し、そして、それらの危機管理の考え方がサイバー攻撃対処にも通じることを学生に考えて欲しかったからである。まさに、実空間における有事を含めた各種事態への危機管理の考え方（＝不易）が、サイバー空間という一見まったく異なる場でのサイバー攻撃対処（＝流行）にも通じることを理解して欲しいのである。

自衛隊が近年経験した危機管理の事例として、東日本大震災への対処とそれに連動した福島第1原発への対処がまず挙げられるであろう。戦後最大の危機と言っても過言でない

これらの事態に対して、その最前線で奮闘した自衛官は数知れないが、当時、陸上幕僚長という陸上自衛隊の最高位の職にあり、まさに自衛官人生の全てを賭けて全身全霊で奮闘した防大の大先輩の記録がある。それは、『即動必遂 東日本大震災 陸上幕僚長の全記録』（火箱芳文著）である。

本書では、巻頭の五百旗頭前防衛大学校長推薦文でも引用されているように、3・11大地震直後の火箱陸幕長の行動にまず驚かされる。火箱陸幕長は「これはただごとではない。戦になる。」と直感し、市ヶ谷防衛省A棟11階から4階の陸幕長室まで下るわずかな時間に、この状況に最も適した部隊運用計画をみずから立てるのである。

発災前、宮城県沖地震の発生確率は30年間で99%と言われており、東北方面隊は「対処計画」を作成し「みちのくALERT 2008」などの訓練も重ねていた。ただ、これほどまで広範囲で甚大な被害が出る震災は予測していなかったため、全国規模の部隊運用計画はどこにも無かった。陸幕長は周辺国に対する防衛警備も考慮した作戦計画を立てて、執務室到着後すぐに各方面総監へ電話した。ここで注意しなければならないのは、2006年から統合運用体制に移行し、防衛大臣の命令を執行するのは陸・海・空の各幕僚長ではなく統合幕僚長の権限になっていた。それにもかかわらず、部隊運用に関して陸幕長が各方面総監に直接電話するのは越権行為ではないかとの疑念が沸くのであり、それは火箱陸幕長も十分認識しつつ、クビを覚悟で電話するのである。ただ、本書で「命令を出した」との記述があるが、命令は権限のある者しか出せないことを考えると、厳密には命令ではなく（命令口調の）アドバイスと捉えることが正しいのかもしれない。自衛隊法第83条2項但し書きでは、「防衛大臣又はその指定する者（方面総監等）は特に緊急を要し、都道府県知事等からの災害派遣の要請を待ついとまがないと認められるときは、要請を待たないで部

隊等を派遣することができる」とあるため、火箱陸幕長からの（命令口調の）アドバイスを受けた各方面総監が初動において自主的に部隊を動かしたと見なすこともできる。火箱陸幕長が各方面総監に電話した作戦計画はその後速やかに統合幕僚監部に挙げられて、正式に大臣命令として出された。

火箱陸幕長の英断のおかげで、陸上自衛隊各方面隊は初動での行動の目標を与えられて各部隊は迅速な行動を取ることができ、人命救助などに生かされた。1万9,286人（全体の約7割）という自衛隊による人命救助の数は、阪神・淡路大震災での自衛隊による救助者数165名と比較して歴然とした差がある。これは、紛れもなく火箱陸幕長が常日頃から危機管理について深く考えていたことと、職を賭けて各方面総監に直ちに電話した成果であろう。本書でのそれ以降の震災対処の詳細な記述は読む者を引きつけて離さない。

一方、もう一つの危機である「福島第1原発」への対処については別の意味で驚かされる。なぜなら、火箱陸幕長が「危ない。原発は危険だ。これからは原発に対応しなければならない。」と認識するのは、3月12日の福島第1原発1号機の爆発ではなく、何と発災3日後の3月14日に3号機が爆発した時なのである。

福島第1原発は、地震と津波により3月11日15時37分には6号機を除いて1号機から5号機まで全交流電源喪失という極めて危険な状態となっており、現場は吉田昌郎所長以下この危機を乗り切るためにまさに生死を賭けた戦いを繰り広げていた。その危機的状況が陸上自衛隊の中枢に全く伝わっていなかったことが本書からわかり、愕然とさせられる。

日本いや世界に甚大な影響が及ぶかもしれない危機的状況下、原発関係者以外で原発危機に最も対処可能な陸上自衛隊のトップに刻々と変化する情報がしっかり伝わる態勢になっていれば、福島第1原発危機への対処は全く異なったものになっていたであろう。なぜ、その重要な情報が伝わらなかったかの疑問は本書を読むとよくわかる。

3月17日の原発3号機への陸上自衛隊への放水などの箇所は、火箱陸幕長の原発に対する危機感と陸上自衛隊がやらねばという決意に溢れ、一気に読み進んでしまう。

第3章『前線部隊の苦闘』と第4章『日米共同「トモダチ作戦」』も現場の指揮官・部隊が何を考えどう動いたか、現場をつぶさに見た陸幕長でしか書けない記述のオンパレードである。卒業後、陸・海・空の部隊で幹部として勤務する学生諸官にとって必ず役に立つ内容である。

第5章『明日の防衛に向けて』は火箱元陸幕長の陸上自衛隊入隊以来38年間の自衛隊勤務での様々な思いが詰まっている。「防衛計画の大綱」や昨年9月に成立した、いわゆる「平和安全法制」と比較しながら読むことを推奨する。

危機管理について私自身もまだまだ勉強の途上にあるが、本書は危機管理を学ぶ上でたいへん貴重な1冊となっている。多くの学生が本書を読む際の参考になれば幸いである。

※図書館所蔵図書の請求記号と配架場所

396.54-H54

（1階 国防軍事図書配架コーナー）



## ~~~~~学生推薦図書を紹介~~~~~

阿川 尚之 著『海の友情 ～米国海軍と海上自衛官～』を読んで

本科学生 応用物理学科 4 学年 小沼慶明 学生



私たちは海上自衛隊で活躍された先輩達をどれほど知っているのでしょうか。教科書やテレビといった世間一般でよく取り上げられる軍人とは、多くが「英雄」として国や国民を守り戦い、賞賛された人物だと思います。そのため、旧日本海軍では資料館や教科書で英雄のように名前が伝えられている人物が多くいる一方で、海上自衛官の名前があまり伝えられることはありません。それに加えて、海上自衛隊創設期から長い間、その存在をタブー視する風潮があったことを考えると、ますますその活躍が伝えられる状況とは言い難いものであったと思います。それでも、自身の事績が飾られることが期待できないことを

承知で、多くの海上自衛隊の先輩達が日々訓練を怠らず、いざというときの危機に対する備えを欠かさなかった努力と功績は紛れもなく存在し、受け継がれています。このような姿を見ても海上自衛隊の先輩達が誇り高い存在であったことが伺えます。しかし、防衛大学校の学生である私たちでもどれほどその活躍を知っているでしょうか。例えば、元海上自衛官の中で、アメリカ海軍士官に対して講話を行った際、その人格と理路整然とした話に感銘し、「なぜ米海軍にはあのような立派な提督がないのか」と言わしめるほどの人物がいたことを知っていたのでしょうか。このような誇れる先輩たちがいた事を私たちはもっと知っておくべきだと強く思います。これまでの海上自衛隊の軌跡を活躍された人物とともに知ることができるものとしてこの本を紹介したいと思います。阿川尚之著『海の友情～米国海軍と海上自衛官～』（中央公論新社）です。この本は、創設期から湾岸戦争後の掃海部隊派遣までの海上自衛隊とその発展に貢献したアメリカ海軍将校との友情の物語です。

この本は、元アメリカ海軍軍人で、後に国防次官特別補佐官としてアメリカの対日政策で大きな影響力を発揮するジェームズ・アワールの活躍を軸に書かれています。アワーが海上自衛隊との関わりを持つきっかけになったのは、海上自衛隊が掃海部隊派遣という形で朝鮮戦争に関わっていた事実を知り、海上自

衛隊の成立の歴史を博士論文のテーマに選んだことです。そして、研究を通して海上自衛隊の創設期から発展の過程を積み上げていく上で、海上自衛隊とアメリカ海軍との間には友情といったものに結ばれたエピソードが存在していたことがわかっていきます。

日本に勤務したことがあるアメリカ海軍の軍人の中には、その多くが現在にいたるまで、日本と日本人に好意的で親しみを感じていったようです。アメリカ海軍の提督の中には、嫌日家だった人が日本に来たことで親日家になっていった人もいます。その一人に、海上自衛隊の誕生から大きな影響力を発揮したアーレイ・バーク将軍がいます。アーレイ・バーク将軍は、太平洋戦争において旧日本海軍との実戦経験があり、日本に対しての印象は戦争を通してのものしかなかったため、日本人に対して軽蔑した視点を持っていました。そのため、日本に着任することが決まった時、はじめは日本人とはある程度距離を置くようにしようと決めていました。しかし、日本人と接するうちに、気遣いと優しさに触れてだんだんと自身の認識を疑うようになります。そしてふとした出来事から旧日本海軍軍人の元海軍中将草鹿任一や元海軍大将野村吉三郎と出会い感化され、親日家へと変わって行きました。アーレイ・バークはその後海上自衛隊に対してその発展に協力を惜しみませんでした。また、海上自衛隊がまだ十分な力を持っていなかった時期でもその重要性を訴え続けました。お互いを信用し、必要ならば協力を惜しまないアーレイ・バークのような良き理解者がいた事が当時の海上自衛隊にとってどんなに大きな存在だったかは計り知れません。このようなエピソードは、アーレイ・バークに限らず、ジュリアン・バークやジェームズ・ハロウェイといった提督達と中村悌次元海上幕僚長をはじめとする日本の海上自衛

官との間でも繰り返されます。おそらく、これから将来にかけてもこのような関係は続いていけるのだと感じます。

「友情」の大前提にあるものは、お互いが同等に信頼し合い、尊敬し合えることであると思います。その中で、片方は戦勝国の大海軍の軍人で一方は敗戦国の一度消滅した軍隊の軍人です。その軍隊の軍人がお互いを同等に信頼し合える関係にまでになったということは、日本の海上自衛官においてもアメリカ海軍の軍人に劣らない人たちがしっかりと支えられていたことと同等であると考えています。私は、この本を読んで、国を超えた友情の物語を知るとともに誇らしい海上自衛隊の先輩たちのもとの将来勤務できることを光榮に思います。

※図書館所蔵図書の請求記号と配架場所

397.21-A19

(1階 国防軍事図書配架コーナー)

※本推薦図書は、今年度のビブリオ競技会において「国際関係」ジャンルにて発表されました。

## 図書館からのお知らせ

### ① 「ビブリオ競技会」の実施

平成27年12月10日に、「ビブリオ競技会」を記念講堂において実施しました。

本年度からは学生行事として、学校長以下、四役各部課長、各学群長、各大隊首席指導教官を招待し採点にも協力をいただきました。

競技会主題「創造への一歩」・副題「10年後の自分に贈る本」として、学生の読書に対する関心を昂揚し、知性の涵養と教養の充実を図ることを目的とし、「国際問題」「自然科学」「文学」の順に3ジャンルでの大隊による対抗形式をとり、各ジャンル発表後に投票を行い、合計得票数により順位を決定しました。

熱戦の結果は以下のとおりです。

順位	大隊	書名・著者名	得票数
1	2大隊	『第二次大戦回顧録』 ウィンストン・チャーチル 『スポーツ栄養学』 鈴木 志保子 『金閣寺』 三島 由紀夫	8,035
2	1大隊	『私は真珠湾のスパイだった』 吉川 猛夫 『これが物理学だ』 ウォルター・ルーウィン 『正義の人々』 アルベール・カミュ	7,799
3	4大隊	『防衛大学校で戦争と安全保障をどう学んだか』 杉井 敦 『宇宙に外側はあるか』 松原 隆彦 『高瀬舟』 森 鷗外	7,767
4	3大隊	『海の友情～米国海軍と海上自衛官～』 阿川 尚之 『偶然の科学』 ダンカン・ワッツ 『海の翼』 秋月 達郎	6,399

今年度は、第2大隊が総合的に最多票を集めて優勝し、学校長から顕彰板等を授与されました。



(写真は國分小学校長(中央)より顕彰板を受ける優勝2大隊の松田将学生)

### ② 平成27年度「防大生の、防大生による、防大生のための1冊」年間上位表彰

総合情報図書館では昨年度に引き続き本年度も、「防大生の、防大生による、防大生のための1冊」と題して本科・研究科学生が推薦する本と所感文を選抜し、全学生に学内メールで投票を依頼いたしました。年間12回の配信をし、合計60冊の中から以下の年間得票数上位5冊を選び、3月8日に表彰を行いました。

順位	推薦者	書名・著者名
1	3学年122小隊 相川 大海	『コサック軍シベリアをゆく』 バルバラ・バルトス・ヘップナー
2	4学年111小隊 山本 匡崇	『教場』 長岡 弘樹
3	3学年122小隊 渡邊 裕二	『99.9%は仮説』 竹内 薫
4	4学年222小隊 齋藤 遼太郎	『コマンド・カルチャー』 イエルク・ムート
5	3学年121小隊 吉田 柊嗣	『人を動かすリーダーの言葉』 片山 修

## ③ 図書の購入希望の推奨について

総合情報図書館では、学生のみなさんから図書の購入希望を出していただくことを推奨しています。他の学生に勧めたい本がある学生は、是非希望を出してください。

学内専用ホームページにログインして、「図書情報」をクリック、総合情報図書館のサイトから「購入希望申込」をクリック、図書名などを記入するだけです。

## 編集後記

今号では、小林幹事、白川教官、大久保教官から御寄稿を賜りました。また、小沼学生にもご執筆いただきました。心より御礼申し上げます。

最近、いくつかの公立図書館を訪れる機会があったのですが、防衛大学校図書館の蔵書が多いこと、そして、一般書も充実しているのですが、特に専門書の充実についても、改めて驚くとともに、そのような環境が身近にあることに喜びを感じるがありました。

皆さんも、授業や校友会の合間に、気ままに蔵書を手にとってみて、先人の知の蓄積を肌で感じてみてはいかがでしょうか。それだけでも、学校生活はより豊かなものになると思います。

編集委員長 山中 倫太郎

NADAL Bulletin Vol.30, No.2

防衛大学校図書館だより 2016. 3. 12

発行及び発行人

〒239-8686

神奈川県横須賀市走水 1-10-20

防衛大学校総合情報図書館 Tel. 046-841-3810

館長 武田 康裕

編集委員

山中 倫太郎 (公共政策学科)

伊達 新吾 (応用化学科)

福田 恵美子 (情報工学科)

編集庶務

大堀 亘 (総合情報図書館事務室)

櫻井 貴夫 (総合情報図書館事務室)

連絡先

〒239-8686

神奈川県横須賀市走水 1-10-20

防衛大学校 総合情報図書館事務室

「図書館だより」事務局

Tel. 046-841-3810 FAX. 046-843-3818